

kawa: Kashima, Sekidōzan, 400 m (T. Yamazaki 1984, TI); Kanazawa, Iouzen, Kunimitōge (N. Fukuoka 1961, no. 4321, KYO). Pref. Fukui: Yashagatake (Z. Tashiro 1929, KYO).

○シャクナゲ類の学名(原 寛) Hiroshi HARA: Scientific names of the *Rhododendron Degronianum* group

1982年 Chamberlain は、レンゲツツジに広く用いられている *Rhododendron japonicum* (A. Gray) Suringar (1908) は暫定の学名で正当に出版されなかったとして、ツクシシャクナゲに対し *R. japonicum* (Blume) Schneider (1909) を起用した。しかしこのように *R. japonicum* という学名がレンゲツツジからツクシシャクナゲに移されて使用されることになると、園芸的にも広く知られている2種の学名に国際的に大きな混乱を起すとして多くの人の関心をひいた。すでに1981年には *R. japonicum* (Blume) Schneider を命名規約 Art. 69 により廃棄するよう求めた提案が *Taxon* 30: 665 (1981) に掲載され、私も委員の一人である種子植物命名委員会に付託された。私は *R. japonicum* (A. Gray) Suringar (1908) は仮の名ではなく、これまで通り正当に出版されたと解釈できると考え、その理由をのべて、この場合の学名の安定を計るために最もよい解決法であると強く主張した。初めのうちは仲々議論がかみ合わず色々な意見が出され長びいたが、ようやく最近種子植物命名委員会で全員一致でこの考えが認められ近く *Taxon* 誌上に結果が報告されることになった。

これでレンゲツツジの学名は *R. japonicum* (A. Gray) Suringar (1908) として安定した。しかし *R. Metternichii* Sieb. et Zucc. (1835) の方は *Hymenanthus japonica* Blume (1826) が異名として引用されていて、当時は *japonicum* の種名を採用すべき状態であったので、Art. 63.1 の不要名として非合法の学名となるのは避けられない。また日本のシャクナゲ類の分類は仲々難しい。花の5数性のアズマシャクナゲと7数性のツクシシャクナゲとは、分布も生育状態も異なり別種としてよさそうに見える。ヒマラヤでも花の5数性のものと7数性のものとは一般に別種とみなされている。しかし日本では最南端の屋久島に5数性のヤクシマシャクナゲが産し、また中間の東海地域にはキョウマルシャクナゲが知られている。そこで日本の諸型を精査した山崎敬博士(1964)は、これらを同一種中の地方変異とみれば相互の関係がよく理解できると述べておられる。毛の性質の変異性その他更に検討を要する問題もあるが、山崎説に従うと最も早い種名はアズマシャクナゲにつけられた *R. Degronianum* Carrière (1869) であり、シャクナゲ類の学名は次のようになる。

***Rhododendron Degronianum* Carrière in Rev. Hort. 40: 368, t. 77 (1869) —**

Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 29 (1949)—Rehder, Bibl. Cult. Tr. & Shr. 505 (1949)  
—Sealy in Bean, Tr. & Shr. ed. 8, 3: 644 (1976), p. p.

subsp. **Degronianum** アズマシヤクナゲ

*Rhododendron Metternichii* Sieb. et Zucc.  $\beta$ . *pentamerum* Maxim., Rhodod. As. Or. 22 (1870).

*R. japonicum* (Bl.) Schneid. var. *pentamerum* (Maxim.) Hutchinson in Bot. Mag. 137: t. 8403 (1911)—Chamberlain in Not. Bot. Gard. Edinb. 34: 310 (1982).

*R. Metternichii* subsp. *pentamerum* (Maxim.) Sugimoto, New Key Jap. Tr. 470 (1961)—Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 39: 18 (1964).

subsp. **heptamerum** (Maxim.) Hara, comb. et stat. nov. ツクシシヤクナゲ

*Hymenantes japonica* Blume, Bijdr. Fl. Ned.-Ind. 862 (1826).

*Rhododendron Metternichii* Sieb. et Zucc. [Fl. Jap. 23, t. 9 (1835), nom. superfl.] ex Wilson in Journ. Arn. Arb. 4: 35 (1923)—Nakai, Tr. & Shr. Jap. ed. 2, 63 (1927)—Tagg in Spec. Rhodod. 578 (1930)—Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 41 (1949)—Rehder, Bibl. Cult. Tr. & Shr. 505 (1949)—Nitzelius in Acta Hort. Gotob. 24: 171 (1961)—Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 39: 17 (1964).

*R. Metternichii*  $\alpha$ . *heptamerum* Maxim., Rhodod. As. Or. 21 (1870).

*R. Hymenantes* (Blume) Makino in Bot. Mag. Tokyo 16: 33 (1902), nom. superfl. ex Matsumura, Ind. Pl. Jap. 2(1): 460 (1912).

*R. japonicum* (Blume) Schneid., Ill. Handb. Laubh. 2: 490 (1909)—Chamberlain in Not. Bot. Gard. Edinb. 39: 308 (1982); non *R. japonicum* (A. Gray) Suringar (1908).

*R. Degronianum* var. *heptamerum* (Maxim.) Sealy, l. c. 645 (1976).

var. **hondoense** (Nakai) Hara, comb. nov. ホンシヤクナゲ

*R. Metternichii* var. *hondoense* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 38: 26 (1924)—Yamazaki, l. c. 17 (1964).

var. **kyomaruense** (Yamazaki) Hara, comb. nov. キョウマルシヤクナゲ

*R. Metternichii* subsp. *Metternichii* var. *kyomaruense* Yamazaki, l. c. 17 (1964).

f. **amagianum** (Yamazaki) Hara, comb. nov. アマガシシヤクナゲ

*R. Metternichii* var. *kyomaruense* f. *amagianum* Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 56: 365 (1981).

subsp. **yakushmanum** (Nakai) Hara, comb. nov. ヤクシマシヤクナゲ

*R. yakushmanum* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 35: 135 (1921)—Hara, l. c. 56 (1949)—Chamberlain, l. c. 310 (1982), subsp. *yakushmanum*.

*R. Metternichii* var. *yakushmanum* (Nakai) Ohwi in *Bull. Sci. Mus. Tokyo* 33: 81 (1953).

*R. Metternichii* subsp. *yakushmanum* (Nakai) Sugimoto, *New Key Jap. Tr.* 470 (1961)—Yamazaki, *l. c.* 39: 17 (1964).

*R. Degronianum* var. *yakushmanum* (Nakai) Kitamura in *Acta Phyt. Geobot.* 25: 38 (1972).

var. **intermedium** (Sugimoto) Hara, *comb. nov.* ウスゲヤクシマジャクナゲ

*R. Metternichii* subsp. *yakushmanum* var. *intermedium* Sugimoto, *l. c.* 471 (1961)—Yamazaki, *l. c.* 39: 17 (1964).

(東京大学 総合研究資料館植物部門)

○オオアマミテンナンショウの芽生え第一葉について (邑田 仁) Jin MURATA: The first leaf of *Arisaema heterocephalum* Koidz. subsp. *majus* (Serizawa) J. Murata (Araceae)

テンナンショウ属の芽生え第一葉の形状は成葉の葉身の形状と深い関連をもっており、類縁を考察するうえで重要な特徴とみなされる (堀田 植物分類地理, 21: 9-16, 1964; J. Murata *Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo*, III, 12: 432-482, 1984)。現在までに32分類群が調べられており、以下の5つのタイプが認識されている。すなわち第1葉が葉身を持つ普通葉で、その葉身が①心形となるもの、②ほこ形となるもの、③3小葉に分裂するもの; および第1葉が④鞘状葉できわめて短く、内側の休眠芽を包んでいて地上に出てこないもの、⑤鞘状葉でよく発達し、地上に出て、すぐ後から伸びてくる普通葉(第2葉)の基部をとり囲んでいるものである。

種としてのアマミテンナンショウ *A. heterocephalum* は、沖縄島のオキナワテンナンショウ subsp. *okinawaense* Ohashi et J. Murata の集団でも、奄美大島や徳之島のアマミテンナンショウ subsp. *heterocephalum* の集団でも、徳之島のオオアマミテンナンショウの集団でも、果実をつける個体はめったに見られず、熟した種子を持つものはさらに稀である。従ってこれまでは発芽力のある種子を入手することができなかった。ところが1984年9月に徳之島において、オオアマミテンナンショウの1個体からよく熟した多数の種子を得ることができた。オオアマミテンナンショウの種子にはアマミテンナンショウやオキナワテンナンショウと同じく表面が淡褐色で紫褐色の斑があるが、このような斑のある種子は少なくとも日本産の種類では他に見られない独特のものである。

東京大学理学部附属植物園の温室内で1984年10月に播種したところ、1985年2月に、芽生え第1葉が地上に伸出し、葉身は鳥足状に5小葉に分裂することが明らかとなった